

広がる共感の輪

希望

この手に

沖縄の貧困・子どものいま

第3部

地域ネットワーク

「できたよー」。土曜日のお昼すぎ。浦添市のうらそえぐすく児童センターの調理室では、大人に見守られながら地域の子どもの手が料理を作る。エプロンを身に着けた子どもたちから声がかかると、室内にいた他の子どもたちが遊びの手を止め、浦添成跡が見える風通しの良い縁側に食卓を準備し始めた。にぎわう食卓のそばの道に顔見知りの子が1人で歩いているのを見つけた。何して遊ぶの、おいでよと誘う声が飛ぶ。

ていーだこども食堂(浦添市)

センターでは2015年5月から毎週土曜日に「ていーだこども食堂」が開かれる。家に昼食が準備されていない子や、子どもだけの「孤食」の子を含めたみんなで楽しめる昼食の場をつくって来た。児童センター、小学校PTA、市社会福祉協議会を軸に多くの人が関わる。「できる人が、できるときに」。時間がたてば次の誰かにバトンタッチできるよう「広がった細い糸のような網」で子どもの育ちを支える。

◇◇◇
始まりは衣類だった。冬に暖かな服を着られない子どもたちがいることに気付いた浦添中学校区3小学校のPTAが、状態の良い衣類を集めた。学校や児童センターと連携し、必要な子にさりげなく提供できる



浦添成跡からの道が通る明るい通路で昼食を囲む子どもたち。「カレーライス作り」で「トマトは苦手」な子が嫌んだ11月、浦添のうらそえぐすく児童センター

PTA発、柔軟な協力体制

体制を13年度に整えた。

内部では当初、異論もあった。「困窮世帯など特定の子どもを対象にするのは、全体のために動くPTAの目的に反すると反対意見も出た」。浦添小PTAの梁

裕之会長は振り返る。「地域に支えられた子は地域に力を吐くようなことをしない。非行など問題行動が減れば、周りの子どもにも良い」と説得した。さらに有志でこども食堂運営委員会を結成し、「衣」から「食」へ活動を拡大させた。

浦添市には県内では珍しく全小学校区に児童センターがあり、市社協は全中学校区にコミュニティソーシャルワーカー(CSW)を配置している。

浦添中学校区のCSW・山城梢子さんの事務所はうらそえぐすく児童センター内にある。運営委に加わり、自治会や民生委員を回って協力を呼び掛けた。「自治会活動も高齢化しつつある中、子育て世帯とのつながりができて喜ばれた(山城さん)。多くの自治会が食材を提供してくれた。婦人会の協力で、夏休みにはラッシュ

を配る活動も実現した。運営委員の勤務先や、つながりのある企業にも「営業」し、食材の提供はどんどん増えた。市も15年度から

ら助成を始めた。

使い切れないほどの食材が集まったときには市のフードドライブを介して他の必要な人に渡したり、漬け物など加工品を作って地域に配ったりしている。「手間をかけて素材を加工し、誰かの役に立つ経験もできている」と児童センターの園仲慶子館長は活動の深まりを実感している。

◇◇◇
運営委員が担当していた事務は今後、浦添小PTAが引き受ける方向だ。現在のメンバーは子どもの成長とともにPTAを卒業していくが、組織は続く。「思いを持った人が、無理なく続けられる仕組みを作りたい」と梁会長は話す。

原動力は、地域愛だ。困窮世帯の親たちも同じ地域で育った顔見知り。「自分にも厳しい時期があった。人ごとでは思えない」と立ち上げメンバーの一人・根間正勝さんは言う。「できないことは周囲が手助けすればいい。しんどさ

に共感して一緒に頑張ろうと伝える人がいれば温かい地域になる。生まれ育った地域を良くしたいという思いがつながり、広がっていく。
●(子どもの貧困取材班) (随時掲載)

孤立し、貧困状態にある子どもや家族を支える取り組みが各地で広がっている。先進的な取り組みを紹介する県内外の事例を紹介する。